

徒然草

静寂の価値

藤村建夫

ミャンマー日本・エコツーリズム会長

ミャンマー中部乾燥地に位置した古都バガンは、42 km²にまたがる広大な土地に約 2400 の寺院とパゴダ（仏塔）が林立し、荘厳な景観を見せている。バガン遺跡はカンボジアのアンコールワット遺跡、インドネシアのボルブドゥール遺跡と共に、アジアの3大仏教遺跡の一つといわれている。今のところ、世界遺産には指定されていないが、その雄大で荘厳な景観は、訪れる人々の心を捕えて離さない。



私は、毎年8月に日本の学生さんを連れて植林ツアーを行い、このバガン近郊の村々で村人と一緒に植林をしている。これは参加型のエコツーリズムなので、村人と一緒に植林し交流会を行って村人との心のふれあいを心がけている。同時にミャンマー各地の自然・文化遺産を観光し、僧院の青少年とも交流する。バガンの遺跡観光は植林ツアーの目玉の一つである。

ミャンマーには、静かな環境に守られて、青年僧が瞑想し、仏教を学習するための僧院を中心とする仏教村が各地に作られている。2400もの寺院とパゴダを持つ静かなバガンは、荘厳さを感じさせる遺跡である。バガン遺跡の真の価値はそのような静寂から得られる自然との不思議な一体感にある。

私はこのバガンの遺跡の静寂さの中に、静かに身を置くことによって、平家物語の出だしにある「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす...」という仏教が教える「輪廻」や「有は無。無は有」といった無我の境地を強く感じる。静かに目を閉じていると、小鳥の鳴き声、遠くに響く鐘の音等が心地よく聞こえてくる。自分と自然が一体化しているような、不思議な気持ちに浸ることができる。そして、静寂の中で、11～13世紀に栄えたバガン王朝時代に熱心に仏教の教えに帰依しようとした、たくさんの人達に思いを馳せ、彼らの祈りをひしひしと感じ取ることができるのである。

私達は、植林の労働から解放されて、夕方6時頃、一つの寺院の小高い部分に上り、雄大

な景観を楽しみながら、日没後の夕闇迫る瞬間に約 20 分間の沈黙と静寂を体験することになっている。夕暮れの中に消えゆくパゴダのシルエットを見ながら、三次元の世界を超えた「無我の境地」を感じる不思議な世界を体験した学生達は、20 分の沈黙を終えた後は、しばらくは話すことも忘れ、不思議な感覚の余韻に浸っている。誰もがとても不思議な体験だったという。沈黙の瞬間は正に悠久の自然との一体感を感じる瞬間なのである。

このようなスピリチュアルな体験ができるので、私達の周りにはいるヨーロッパからの観光客にも沈黙を勧めて見た。すると、フランス人カップルの女性は、「ここはパブリックの場所だから私の自由にさせてちょうだい。今の私には夫とのコミュニケーションが一番大事だから、夫と話をすることが大切なよ。ノーサンキュー！」という返事。ドイツ人家族の反応は「あらそうなの。やってみるわ！」と沈黙に参加。だが、フランス人のカップルは、5 分後には退散。ドイツ人の家族もいつの間にかいなくなっていた。残された私たちのグループは、忠実に 20 分間の沈黙を守り、静寂の価値を十分に感じ取ったのだった。

残念ながら、この貴重な「静寂の価値」を現地の村人と子供達も十分理解していないようだ。外国人観光客も同様だ。パリのエッフェル塔や東京のスカイツリーの展望台でおしゃべりしながら展望しているのと全く同じ心境では、この「静寂の価値」はわからない。だが、今や、そのようなバガン遺跡の「静寂の価値」は、危機に瀕している。物売りの子供達が寺院の上まで来て、観光客に絵葉書、写真、絵画などを「買え、買え」といつてしつこく迫ってくる。また、外国人観光客は、所構わず大声で話し笑っているのも、静寂はいつも破られる。これからますます観光客が増えると、物売りも増え、大型観光バスがひっきりなしに、ブーブーと音を立てて発着し、辺り一帯は騒音の嵐となるだろう。その結果、騒音と粉塵で一帯は喧騒と異臭に溢れた遺跡になるかもしれない。

バガンは神秘的で荘厳な遺跡である。喧騒と異臭をなくしてこそ、その静寂がもたらす価値を体感することができる。より多くの観光客に、この「沈黙の瞬間」を実践することによって、静寂の中で、カラン、カランという澄んだ鐘の音を聞きながら、自然との一体感を感じる「無我の境地」を体感してもらいたいと思う。夕暮れの中に次第に消えゆくパゴダのシルエットを見ながら、三次元の世界を超えた「無我の境地」を感じる不思議な世界を、多くの人々に体感して欲しいと思う。